

茨城県教育財團文化財調査報告第371集

天王原遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

国土交通省常総国道事務所
公益財團法人茨城県教育財團

茨城県教育財団文化財調査報告第371集

てん のう はら
天 王 原 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

国土交通省常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として国土交通省が整備を推進している首都圏中央連絡自動車道は、都心部と中核都市を結ぶ3環状9放射の道路ネットワークです。この道路網の整備により、首都圏の交通混雑が緩和されるほか、環境改善、経済効率の向上など、様々な効果が期待されます。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である天王原遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財團が国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成22年4月から6月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、天王原遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、常総市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木欣一

例　　言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團（現 公益財團法人茨城県教育財團）が平成 22 年度に発掘調査を実施した、茨城県常総市大輪町築地 723 - 1 番地ほかに所在する天王原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
　　調査 平成 22 年 4 月 1 日～6 月 30 日
　　整理 平成 24 年 6 月 1 日～7 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。
　　首席調査員兼班長 皆川 修
　　主任調査員 櫻井完介
　　主任調査員 坂本勝彦
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、次席調査員小川貴行が担当した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 8,520 m, Y = + 11,400 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3, …0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 Pit - ピット SI - 壁穴住居跡 SK - 土坑 TP - 陥し穴

遺物 DP - 土製品 M - 鉄製品 Q - 石器 TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



● 土器 □ 石器

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位はm, cm, gで示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壁穴住居跡の「主軸」は、最大幅をとる軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告書で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にした遺構名は以下のとおりである。

変更 SK 5 → Pit58, SK 6 → Pit59, SK15 → TP 1

欠番 SK 5・6・15

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

天王原遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 壺穴住居跡	10
(2) 陥し穴	19
2 その他の遺構と遺物	20
(1) 土坑	20
(2) ピット	22
(3) 遺構外出土遺物	22
第4節 まとめ	26
写真図版	PL 1 ~ PL 6
抄 錄	

天王原遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

天王原遺跡は、常総市の中央部に位置し、鬼怒川右岸の標高 21 ~ 22 m の台地縁辺部に立地しています。一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業にともない、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 22 年度に約 3,074m²について発掘調査を行いました。



調査の内容

遺跡の範囲は南北 370 m、東西 350 m で、調査区は遺跡の南端部にあたり、鬼怒川の低地から延びる谷津を望む台地部に位置しています。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡 4 軒、陥し穴 1 基などが確認でき、集落跡、狩り場跡であることがわかりました。主な出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品（土器片円盤）、石器（ナイフ形石器・鎌・磨製石斧・磨石・凹いし石・砥石）、石核、鉄製品（釘）です。



調査区全景（南西上空から）



第1号住居跡の遺物出土状況



他の地域の特徴をもつ土器（台付壺）



確認できた縄文時代の住居跡



調査中の陥し穴

調査の結果

堅穴住居跡は、調査区の北東部から集中して確認されています。これらの確認状況や遺跡の立地から、集落の中心は調査区域外の北東方向に存在したと考えられます。住居跡の時期は、出土している土器から、いずれも縄文時代中期中葉(約4,500年前)と考えられます。周辺遺跡で確認された同時期の住居跡と、形態について比較してみたところ、当遺跡の住居跡は比較的規模が大きく、形状や柱の配置などの点で、やや新しい時期の住居構造であることがわかりました。また、他の地域の特徴をもつ土器も出土しています。第1号住居跡から出土している台付壺は、文様の特徴から西関東や中部地方を中心に出土例が多いかつさかしき勝坂式土器と考えられます。

当遺跡の東側は鬼怒川に面し、西側にはかつて飯沼から延びる谷津が間近に迫っていました。当地は地形から移動するのも容易で、他の地域との交流が盛んな先進的地域だったのかもしれません。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所は、常総市において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業を進めている。

平成18年8月21日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成19年1月16・17日に現地踏査を、平成21年9月15・16日に試掘調査を実施し、天王原遺跡の所在を確認した。平成21年10月2日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に天王原遺跡が所在すること及びその取り扱いについて、別途協議が必要であることを回答した。

平成22年2月22日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年2月24日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年2月22日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年2月24日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、天王原遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として財團法人茨城県教育財團（平成24年4月から公益財團法人茨城県教育財團）を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成22年4月1日から6月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

天王原遺跡の調査は、平成22年4月1日から6月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月	6月
調査表達 査士構	準備確 認去 留			
遺構調査			■	
遺物洗浄 注写真 整理			■	
補足調査 収				■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

天王原遺跡は、茨城県常総市大輪町築地723-1番地ほかに所在している。

常総市は、関東平野のほぼ中央部、茨城県の南西部に位置している。市の東側を小貝川、中央部を鬼怒川、西側を飯沼川、東仁連川が南北に流れおり、またそれらに注ぐ支流が市域を縦横に流れている。市の北西部には、かつて飯沼が存在していたが、江戸時代の享保年間に行われた新田開発によって干拓され、現在は水田になっている。市域の地形は、東部に低地が開け、西部に台地が発達している。東部の低地は、鬼怒川・小貝川の氾濫原に堆積した標高12m前後の沖積平野である。西部に位置する台地は標高20~24mで、結城市から常総市にかけての結城台地と、利根川に平行して古河方面から取手市に延びる猿島台地に分けられる。両台地は、細長く南北に延びており、一部に狹隘な谷頭があり組んでいる。

地質は、低地部と台地部では異なった構成を示し、沖積地である低地部では、河川堆積物である砂礫層が堆積し、小貝川や鬼怒川の氾濫時に形成された厚い泥炭層の堆積が見られる。台地部では洪積層に限られ、武藏野段丘とみられる成田層群の上部成田層を基盤とし、河川の氾濫原に堆積した竜ヶ崎砂礫層、青灰色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。

当遺跡は、結城台地の南端にあたる常総市の中央部に位置し、鬼怒川右岸の標高21~22mの台地縁辺部に立地している。南北に細長く延びる台地には、支谷が縦横に入り組み、低位面との比高は約10mである。遺跡とその周辺の土地利用の現況は、主に台地上は畠地として、低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

蛇行して南流する鬼怒川と飯沼川に挟まれた標高20mほどの台地上には、支谷に面した縁辺部を中心に、天王原遺跡をはじめ多くの遺跡が確認されている。ここでは、当遺跡の中心となる時期にあたる縄文時代の遺跡を主として、周辺遺跡について概要を述べる。

旧石器時代の遺跡は少なく、遺構や出土状況が明確ではない。当遺跡と隣接する築地遺跡(3)からナイフ形石器、三本松遺跡(56)からスクレイバーが採集されている。

縄文時代には気候の温暖化が進み、海岸線が内陸深くまで進入する。いわゆる縄文海進が始まる。海進によって、発達した入り江が形成され、台地上からは多数の集落や貝塚が確認されている。当遺跡の周辺でも、貝塚柄山遺跡(早期)(46)、中根遺跡(早~後期)(10)、三本松遺跡(早~後期)、宮原前遺跡(早~前・後期)(11)、中坪遺跡(早~中・後期)(53)、薬師西遺跡(早~後期)(45)、築地遺跡(早~晚期)、満蔵遺跡(早~晚期)(48)、大生郷遺跡(前・中期)(27)、貝塚乙遺跡(前・中期)(49)、久保遺跡(前~後期)(4)、四ツ谷遺跡(前~後期)(23)、安戸東遺跡(前~後期)(62)、満倉北遺跡(前~後期)(61)、金戸遺跡(前~晚期)(21)、窪野台遺跡(中期)(6)、古寺家遺跡(中~後期)(47)、入山遺跡(中~後期)(63)、馬場遺跡(中~晚期)(19)、満倉東遺跡(中~晚期)(60)などが確認されている。前期の遺跡が最も多く、その後は減少傾向に転じて、晩期に至っては急激に減少している。

貝塚柄山遺跡は、1941年に日本古代文化学会によって調査が行われ、早期の貝殻条痕土器やヤマトシジ

ミを中心とする貝類が出土し、小貝塚群として確認されている¹⁾。集落跡は、大生郷遺跡で前期の住居跡10軒、中期の住居跡1軒が確認されている²⁾。

弥生時代は、貝置前沼遺跡、本郷南志辺遺跡、國生本屋敷遺跡で土器片が確認されているのみである。

古墳時代の集落は、前・中期の遺跡は河川にのぞむ沖積地や水田周辺の低台地周縁に多く、後期になると丘陵上や谷津の周縁、台地の深遠部や山間部に分散している。遺跡としては、南袋遺跡（9）、大日遺跡（15）、大生郷遺跡、香取遺跡（43）、満蔵遺跡などがある。

奈良・平安時代の当地域は、下総国岡田郡に属しており、下総国の国府は、現在の市川市国府台付近に置かれていた。周辺の主な遺跡としては、奈良時代中期の集落跡が確認された大生郷遺跡³⁾、奈良時代から平安時代にかけての集落跡が確認された宮原前遺跡⁴⁾、当該期の土器が散布する南袋遺跡、香取西遺跡（12）、久保遺跡、馬場遺跡などがあげられる。本跡から北に約4.5kmの国生地区内に国生本屋敷遺跡があり、1986年の旧石下町による発掘調査と1988年の国立歴史民俗博物館による2回の発掘調査歴がある。1986年の調査では、堅穴住居跡28軒のほか、方形に巡る断面箱築状の大溝を確認し、「丈」の墨書き土器や朱書きの土器などが出土している⁵⁾。1998年の調査では、大溝が古墳時代前期の豪族居館を囲繞する壠であることが確認された。また、7世紀後半の方形に巡る溝跡と掘立柱建物跡が確認され、初期の官衙的な性格付けがなされている⁶⁾。この国生地区内には、下総国司桑原王が創建したとされる延喜式内社の桑原神社もあり、国生本屋敷遺跡の遺構や出土遺物、周辺の地名などから岡田郡衙比定地とされている⁷⁾。10世紀以降は常総平氏を中心に、平将門の一族及び他氏族間の抗争の地となり、数多くの伝説を残している。

中世になると当地域は豊田荘となり、豊田氏の興亡に大きな影響を受けている。豊田氏は下妻・小栗・東条・鹿島氏等の常陸平氏一族とともに源頼朝の軍勢と抗争を繰り返しているが、鎌倉幕府開府後は、御家人として存続している。戦国期には、小貝川西岸の微高地に築かれた豊田城を中心に小田氏と連携して支配を強めるが、その後下妻の多賀谷氏に滅ぼされる。関ヶ原合戦時に豊臣方にいた多賀谷氏も領地を没収され、以後当地域は、徳川幕府の直轄地や旗本の領地となる。

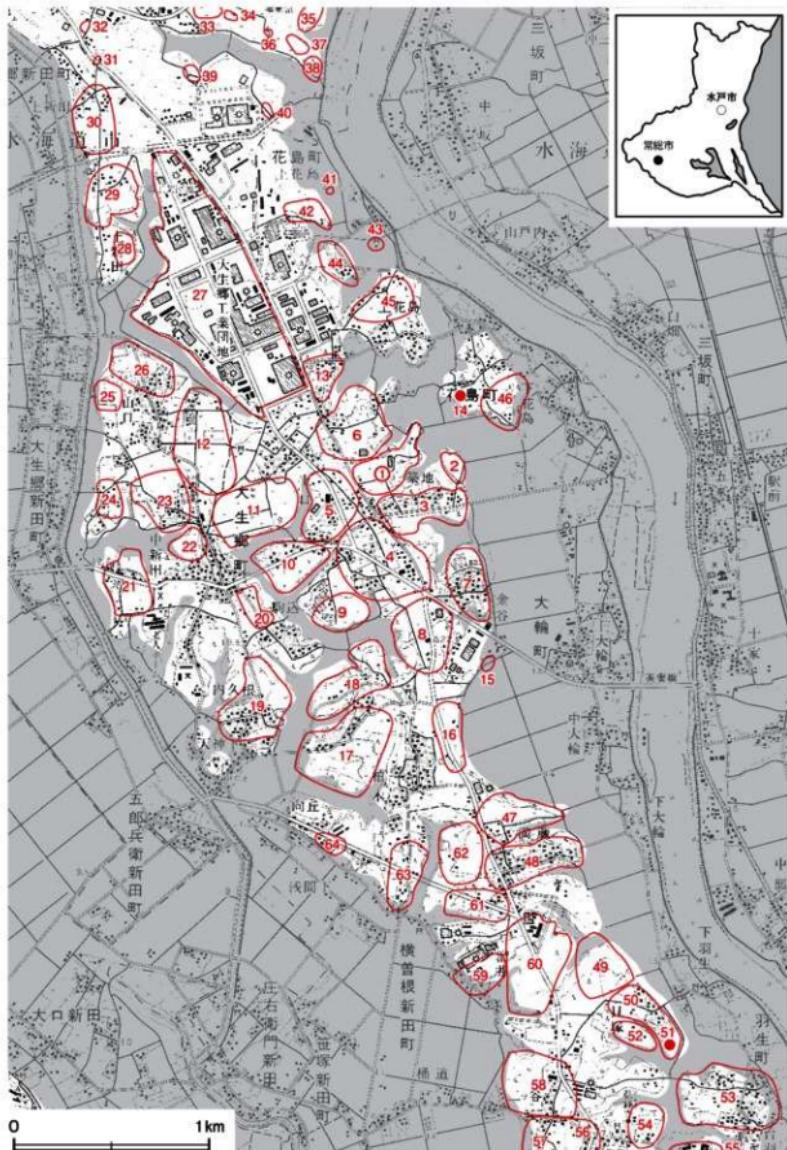
*本章は、「茨城県教育財团文化財調査報告」第335集をもとに、若干加筆したものである。なお、文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

- 1) 江坂輝弥「貝柄山貝塚」「茨城県資料 考古資料編 先土器・縄文時代」 1979年3月
- 2) 桜井二郎「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書 - 大生郷遺跡 - 」『茨城県教育財团文化財調査報告』 XII 1981年3月
- 3) 註2) 文献と同じ
- 4) 斎藤和浩「宮原前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第335集 2011年3月
- 5) 川井正一他「国生本屋敷遺跡発掘調査報告書」「石下町史資料」第1集 石下町史編さん室 1987年3月
- 6) 阿部義平編「茨城県国生本屋敷遺跡発掘調査報告」「国立歴史民俗博物館研究報告」第129集 国立歴史民俗博物館 2006年3月
- 7) 水海道市史編さん委員会「水海道市史 上巻」水海道市 1984年3月

参考文献

- ・水海道市史編さん委員会「水海道市史 上巻」水海道市 1984年3月
- ・茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 水海道」 1985年12月
- ・石下町史編さん委員会「石下町史」石下町 1988年3月
- ・水海道市埋蔵文化財統合調査会編「水海道市埋蔵文化財分布図」水海道市教育委員会 1992年3月
- ・大間武「一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡、大門通遺跡、三本松遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第114集 1996年3月
- ・茨城県教育庁文化課編「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 2001年3月

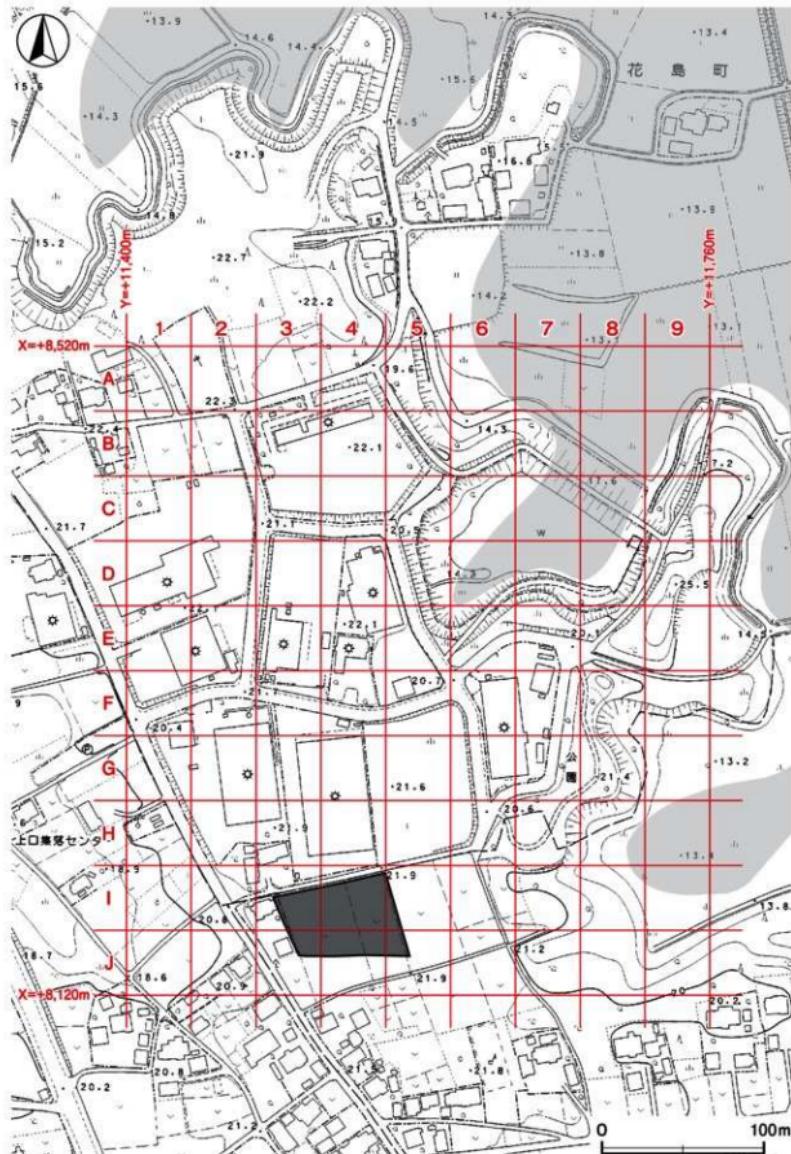


第1図 天王原遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「石下」「水海道」）

※第1・2図の網フセ部は沖積低地、河川及び沼澤（「土地分類基本調査 水海道」を参照に作図）

表1 天王原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	天王原遺跡	○							33	大久保遺跡	○	○					
2	天神山遺跡	○		○○					34	鎌田遺跡	○						
3	築地遺跡	○○			○○				35	宮内遺跡	○	○					
4	久保遺跡	○		○○					36	寺田遺跡	○	○					
5	大部堂遺跡	○		○○					37	四ツ木遺跡	○	○		○			
6	高野台遺跡	○		○					38	古間木遺跡	○			○			
7	大輪陣屋跡	○			○	○	○		39	松山向遺跡			○				
8	榎下遺跡				○○				40	霜田向遺跡	○	○					
9	南袋遺跡	○		○○					41	雉子尾遺跡	○	○○	○				
10	中根遺跡	○		○○					42	雉子尾前遺跡	○	○○	○				
11	宮原前遺跡	○		○○					43	香取遺跡	○	○○	○				
12	香取西遺跡	○		○○					44	鶴ヶ鳥遺跡			○○	○			
13	大橋遺跡	○							45	薬師西遺跡	○	○○	○				
14	下花鳥古墳群				○				46	貝柄山遺跡	○	○○	○				
15	大日遺跡	○		○					47	古寺家遺跡	○						
16	大塚遺跡	○		○○					48	満蔵遺跡	○	○○	○				
17	柏木遺跡	○		○○					49	貝塚乙遺跡	○						
18	小野台遺跡	○		○○					50	貝塚甲遺跡	○	○○	○				
19	馬場遺跡	○		○○○	○				51	貝塚古墳			○				
20	芝崎遺跡	○			○				52	貝塚丁遺跡	○						
21	金戸遺跡	○		○○					53	中坪遺跡	○	○○	○				
22	中新田遺跡	○		○○					54	寿龜山遺跡	○			○			
23	四ツ谷遺跡	○		○○					55	野村遺跡	○	○○	○				
24	六方遺跡	○		○○					56	三本松遺跡	○○		○○○	○			
25	山口遺跡	○		○○					57	郷原古墳			○				
26	前中丸遺跡	○		○○					58	虎松山遺跡	○		○				
27	大生郷遺跡	○		○○					59	満倉南遺跡							
28	後中丸南遺跡	○							60	満倉東遺跡	○	○○	○				
29	後中丸北遺跡	○		○○					61	満倉北遺跡	○	○○	○				
30	古間木前遺跡	○		○○					62	安戸東遺跡	○		○				
31	山王B遺跡	○							63	入山遺跡	○	○○	○				
32	山王A遺跡							○	64	向山遺跡	○	○○	○				



第2図 天王原遺跡調査区設定図（「常総市地形図 2,500 分の 1」から作成）

第3章 調査の成績

第1節 調査の概要

天王原遺跡の範囲は南北370m、東西350mで、調査区は遺跡の南端部にあたり、鬼怒川の低地から延びる谷津を望む台地部に位置している。調査面積は3,074m²で、調査前の現況は畠地である。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡4軒、陥し穴1基、時期不明の土坑14基、ピット59か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に7箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器(深鉢・浅鉢・鉢・台付壺)、弥生土器(壺)、土師器(壺・甕)、須恵器(壺)、土製品(土器片円盤)、石器(ナイフ形石器・細石刃カ・鎌・磨製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石)、石核、鉄製品(釘)などである。

第2節 基本層序

調査区北部の台地上の平坦面(J3d9区)にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った(第3図)。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土で、ローム粒子を少量含む。粘性・締まりとも普通で、層厚は12~21cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は16~29cmである。

第3層は、褐色を呈するハードローム層で、焼土粒子・炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は3~10cmである。

第4層は、明褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は7~22cmである。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は3~10cmである。

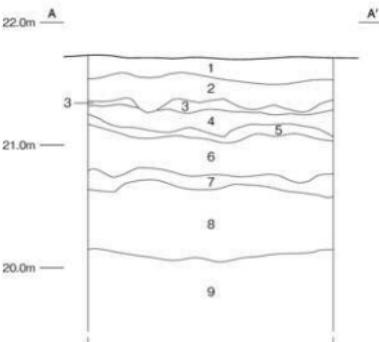
第6層は、暗褐色を呈するハードローム層で、焼土粒子を微量に含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は23~40cmである。第5・6層はやや暗い色調であることから、第2黒色帯に相当すると考えられる。

第7層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は6~19cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層で、上層よりやや明るい色調である。粘性・締まりとも普通である。層厚は43~63cmである。

第9層は、明褐色を呈するハードローム層で、粘性は強く、締まりは普通である。層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は、第2層の上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、陥し穴1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

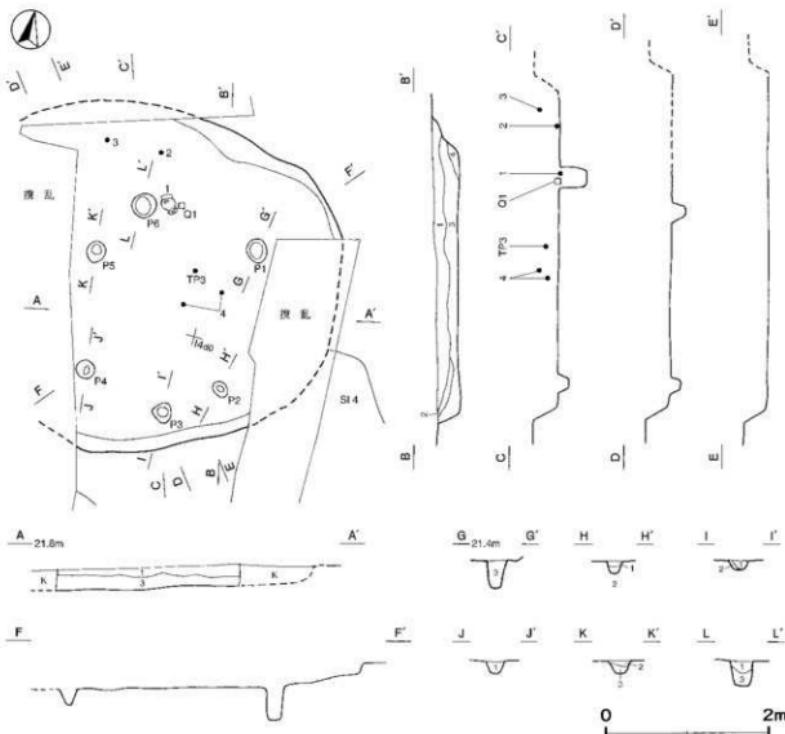
第1号住居跡（第4・5図）

位置 調査区東部のI-4c9区、標高21.1mの台地上に位置している。

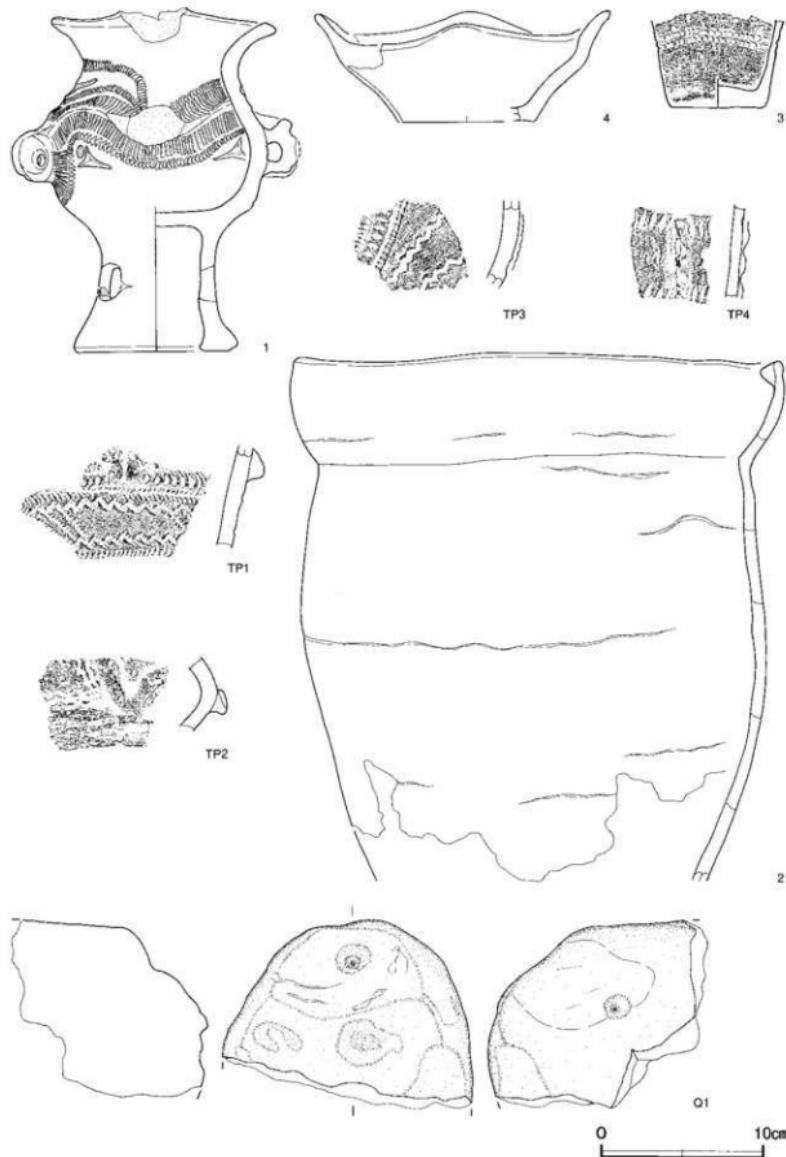
重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 扰乱を著しく受けているため、壁は一部しか確認できなかった。残存している壁から、平面形は径4mほどの円形又は楕円形と推定できる。壁高は16～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、特に硬化した部分は認められなかった。



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

ビット 6か所。深さは13～40cmで、規模にややばらつきはあるが、覆土に共通性が認められることや配置から主柱穴と考えられる。

ビット土層解説

1 細 塵 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

3 暗 褐 色 ローム粒子少量

覆土 4層に分層できる。周囲からの土の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1 楊 暗 褐 色 ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
4 塵 色 ローム粒子少量

遺物出土状況 繩文土器片414点。石器3点(凹石)、剥片1点が、覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。1・2・Q1は北部の覆土下層、4・TP3は中央部の覆土中層、3は北部の覆土上層からそれぞれ出土している。2は土圧によって潰れた状態で出土している。1・2はそれぞれ残存率も高く、覆土下層から斜位で出土しており、住居の廃絶後まもなく廃棄されたものと想定される。

所見 時期は、出土土器や重複関係から中期中葉の阿玉台II式期と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種 別	器種	口径	基高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
1	縄文土器	台付壺	129	21.0	9.6	長石・石英・雲母 にぶい程	二段	縫帶に沿ってキャラピラー文と三角押文を施文	覆土下層	56% PL 5	
2	縄文土器	深鉢	299 (324)	-	-	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通 無文 口唇部は内面に突出	覆土下層	60% PL 5	
3	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	6.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通 段列の粘筋洗模を横位に施文	覆土上層	40% PL 5	
4	縄文土器	浅鉢	[18.0]	6.8	[8.3]	長石・石英・雲母 にぶい赤褐	普通 無文 4単位の波状口縁		覆土中層	60% PL 5	

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	文 様・手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐	刻みを有する縫帶に沿って三角押文	覆土中	PL 6
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	縫帶に沿って半球竹管による平行沈線を施文	覆土中	
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐	刻みを有する縫帶に沿って結節沈線を施文 波状の沈線文	覆土中層	
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・雲母	灰 褐	押正を有する縫帶を垂下 刻み目判が巡る	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 1	凹石	(115)	(153)	(135)	(292.8)	安山岩	側面に磨面 石墨使用	覆土下層	

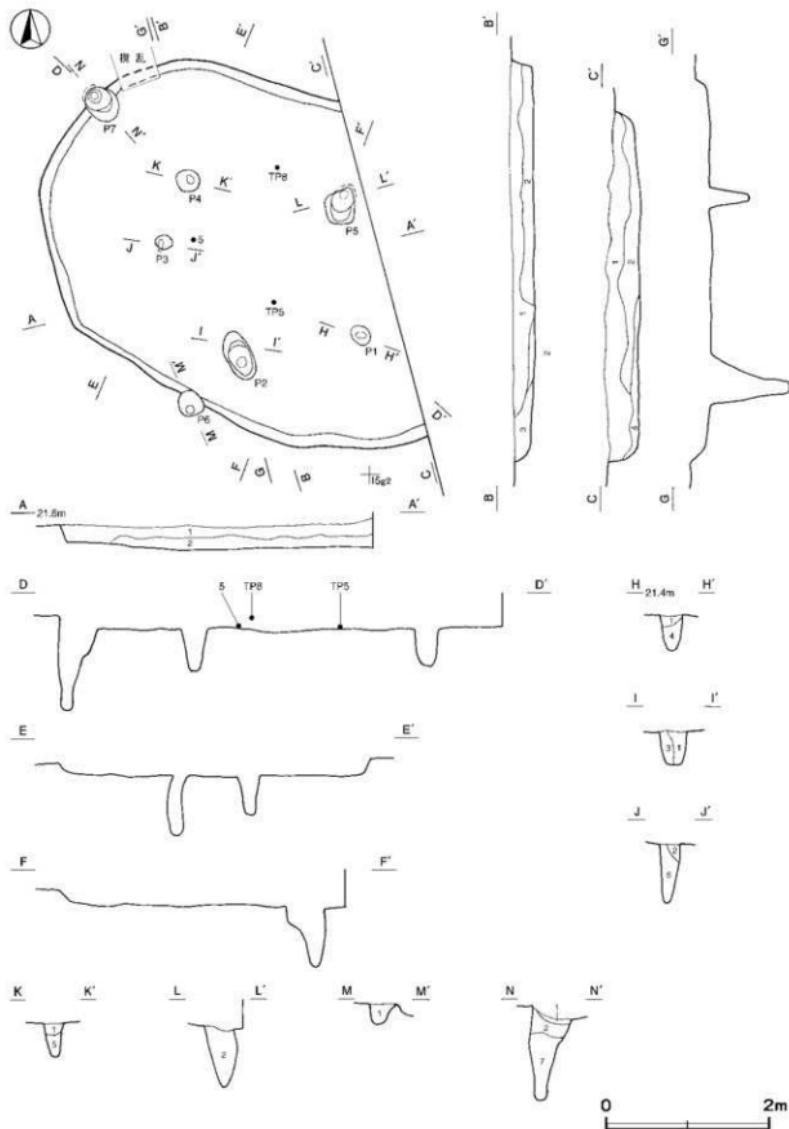
第2号住居跡(第6・7図)

位置 調査区東部のI 5fl 区、標高21mの台地上に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、南北径は4.06mで、東西径は550mしか確認できなかった。平面形は、主軸方向がN-60°-Wの楕円形と推定できる。壁高は11～36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、特に硬化した部分は認められなかった。

ビット 7か所。P 1～P 5は深さ46～95cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 6・P 7は深さ25cm・116cmで、覆土には他のビットと共通性が認められ、住居跡に伴うものと考えられるが、性格は不明である。



第6図 第2号住居跡実測図

ピット土層解説

1	暗褐色	ローム粒子微量	5	極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子少量
3	黒褐色	ロームブロック微量	7	暗褐色	焼土ブロック少量
4	極暗褐色	ローム粒子微量			

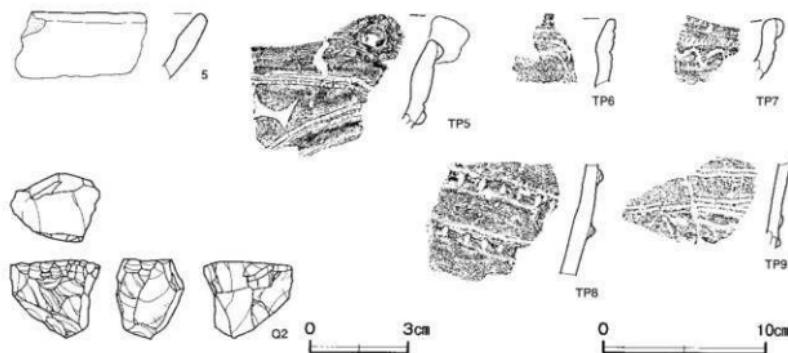
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	3	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量	4	極暗褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片 185点、石核 1点、剥片 6点が出土している。5・TP 5は中央部の覆土下層、TP 8は北壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉の阿玉台 I b～II式期と考えられる。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎 土	色 調	燒成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
5	縄文土器	浅鉢	-	(40)	-	灰岩・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無文	覆土下層	3%

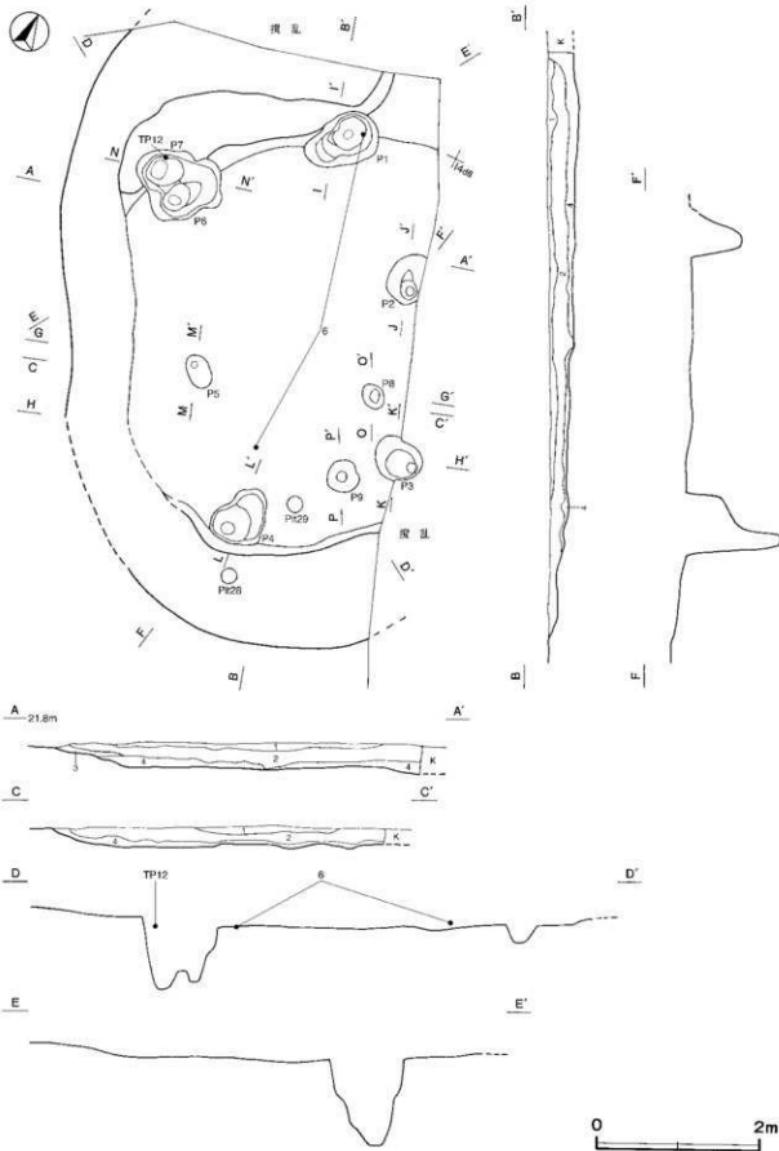
番号	種別	器種	胎 土	色 調	文 様 の 手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	縫合に沿って複列の筋肋沈窓を施文	覆土下層	PL. 6
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	3条の角押文	覆土中	
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	波状口縁 口縁部は角押文で文様を描出	覆土中	
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	削りを有する2条の縫合で文様を描出	覆土上層	
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	縫合に沿って平行斜線を施文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 2	石核	24	28	21	127	黒曜石	打面は転移して剥離	覆土中	PL. 5

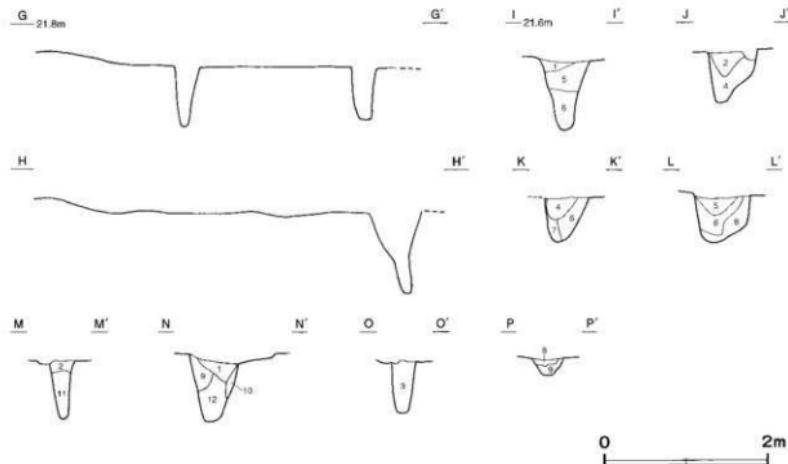
第3号住居跡（第8～10図）

位置 調査区東部のI 4d7区、標高21mの台地上に位置している。

重複関係 第28・29号ピットに掘り込まれている。



第8図 第3号住居跡実測図（1）



第9図 第3号住居跡実測図（2）

規模と形状 北壁と東壁が搅乱を受けているため、南北径は7.20m、東西径は4.54mしか確認できなかった。平面形は、主軸方向がN-15°-Wの楕円形又は隅丸長方形と推定できる。壁は傾斜が非常に緩やかなため、判然としない。確認面から床面までの深さは15~30cmである。

床 墓際は中央部に向かって緩やかに傾斜し、墜際を除く中央部がわずかに凹んでいる。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 9か所。P 1~P 7は深さ64~117cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 6・P 7は、ほぼ同じ位置にあり、建て替えが想定できるが、新旧関係は明確でない。P 8・P 9は67cm・23cmで、ともに性格不明である。

ピット土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子中量
2 褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック微量	10 黒褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	ローム粒子微量	11 黒褐色	ローム粒子微量
6 褐色	焼土ブロック中量	12 黑褐色	ロームブロック少量

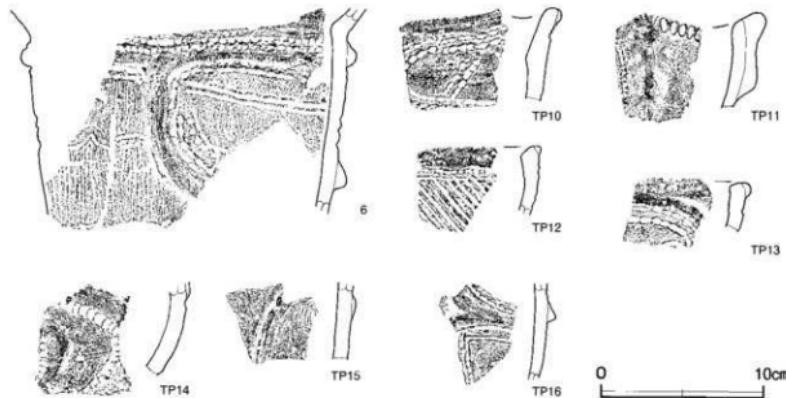
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック微量	3 にぶい褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 繩文土器片230点、剥片24点のほか、混入した石器1点（細石刃カ）が、確認面からピットの覆土に至るまで散在して出土している。6は北部の覆土下層と南部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。TP12はP 7の覆土上層、TP15はP 1、TP11はP 4の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉の阿玉台Ⅱ式期と考えられる。搅乱を受けているため、本来の形状は明確でないが、住居の規模や床面の検出状況から、二段の掘り込みを有する住居跡の可能性がある。



第10図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
6	縄文土器	深鉢	-	(127)	-	長石・石英・ 云母・赤色粒子	灰	普通	縦帯に沿って複列の結節沈線を施文 条綱文	覆土下層 覆土中層	10% PL 6

番号	種別	器種	胎 土	色 調	文 様・手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	に赤い粒	複列の結節沈線で文様を描出	確認面	PL 6
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	口唇部に網目 結節沈綱文	P 4	PL 6
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に赤い黄銀	口唇部は外側に突出 複列の結節沈綱文	P 7	PL 6
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	に赤い粒	縦帯に沿って複列の結節沈綱を施文	覆土中	
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	縦帯に沿って結節沈綱を施文	覆土中	
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英	に赤い粒	断面形は三角の覆面で文様を描出 刻み目列	P 1	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒 褐	縦帯に沿って結節沈綱を施文	確認面	

第4号住居跡（第11図）

位置 調査区東部のI 4d0区、標高21mの台地上に位置している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が第1号住居に掘り込まれているため、東西軸は3.84mで、南北軸は4.72mしか確認できなかった。平面形は、主軸方向がN-39°-Wの隅長方形と推定できる。壁高は8~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 南東側がやや高く、中央部に向かって緩やかに傾斜している。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P 1・P 2・P 4・P 5は深さ50~61cmで、P 3は搅乱を受けているため、深さは26cmしか確認できなかった。覆土に共通性が認められることや配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1	暗 褐 色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	4	黑 褐 色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
2	暗 褐 色	ロームブロック、炭化粒子微量	5	褐 色	ロームブロック、燒土粒子、炭化粒子微量
3	暗 褐 色	ロームブロック、燒土粒子、炭化粒子微量	6	褐 色	ロームブロック、炭化粒子微量

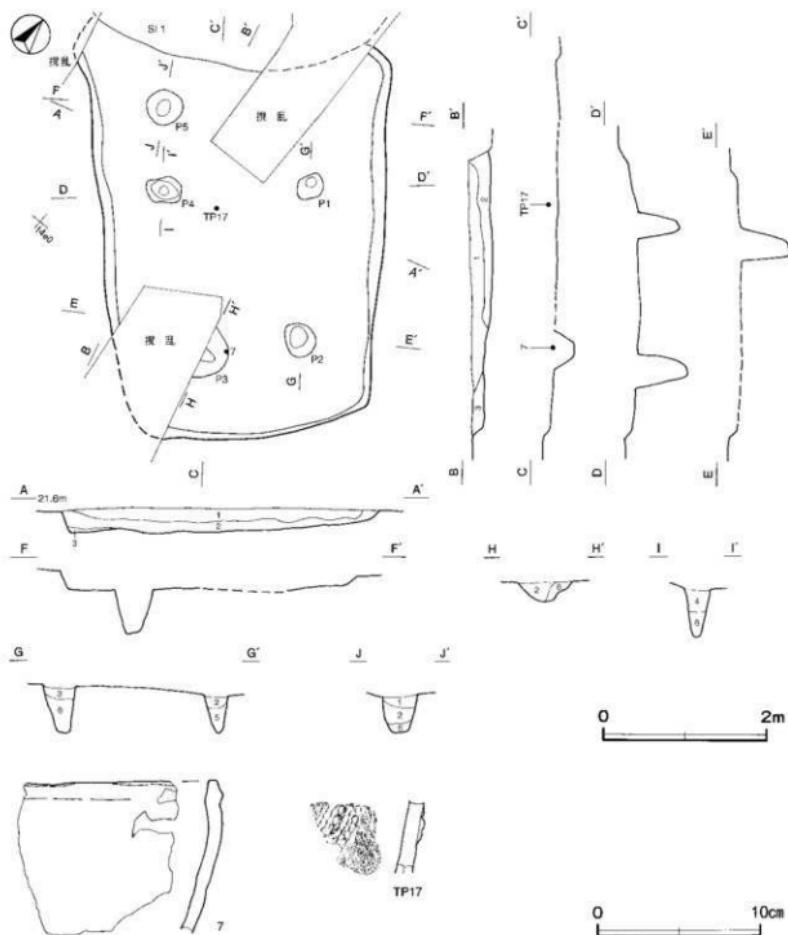
覆土 3層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | | | |

遺物出土状況 繩文土器片 22点、石器 2点（磨石・敲石）、剥片 2点が出土している。7は南部の覆土下層、TP17は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から中期中葉の阿玉台II式期と考えられる。



第11図 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種 別	器種	口径	高さ	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
7	縄文土器	溝跡	-	(9.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にい赤褐	普通	無文	覆土下層	5%

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	文 様 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP17	縄文土器	溝跡	長石・石英・雲母・斜状結晶	にい赤褐	隆起に沿って複列の粘土沈澱を施文	覆土上層	

表2 縄文時代堅穴住居跡一覧表

番号	位 置	平 面 形	主軸方向	規 模		標 高 〔基面×縦断面〕	床面 (cm)	壁溝	内 部 施 設	如 何	覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考 重複関係(古→新)
				延長	幅									
1	14c9 〔内円形〕	-	[4]	16~30	平坦	-	6	-	-	-	自然	縄文土器片、凹石	中間中葉	SI 4→本跡
2	15f1 〔楕円形〕	N-60°-W	(5.50) × 4.06	11~36	平坦	-	5	2	-	-	人為	縄文土器片、石核	中間中葉	
3	14d7 〔楕円形〕	N-15°-W	(7.20) × 4.54	15~30	二段	-	7	-	2	-	人為	縄文土器片	中間中葉	本跡→ PtG28・29
4	14d0 〔狭長方形〕	N-39°-W	(4.72) × 3.84	8~29	傾斜	-	5	-	-	-	人為	縄文土器片、磨石	中間中葉	本跡→ SI 1

(2) 陥し穴

第1号陥し穴（第12図）

位置 調査区東部のJ 4 b9 区、標高21 mの台地上に位置している。

規模と形状 長径2.73 m、短径1.26 mの楕円形で、長径方向はN-21°-Wである。深さは91cmで、底面は幅20cmほどである。横断面形はV字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

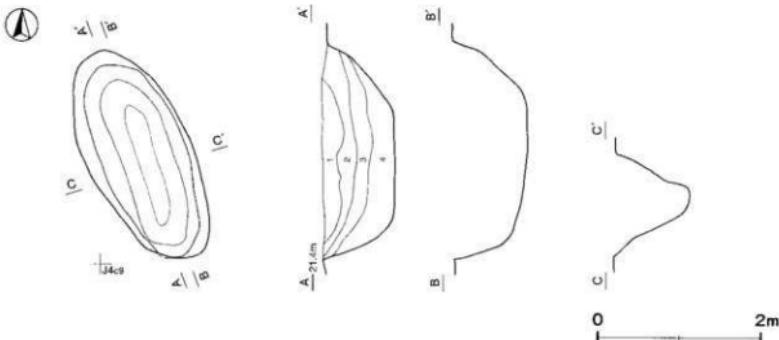
覆土 4層に分層できる。各層にはロームブロックが含まれているが、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 塗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

- 3 黑褐色 ロームブロック・炭化物微量
4 塗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

所見 遺物が出土していないため明確ではないが、規模と形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

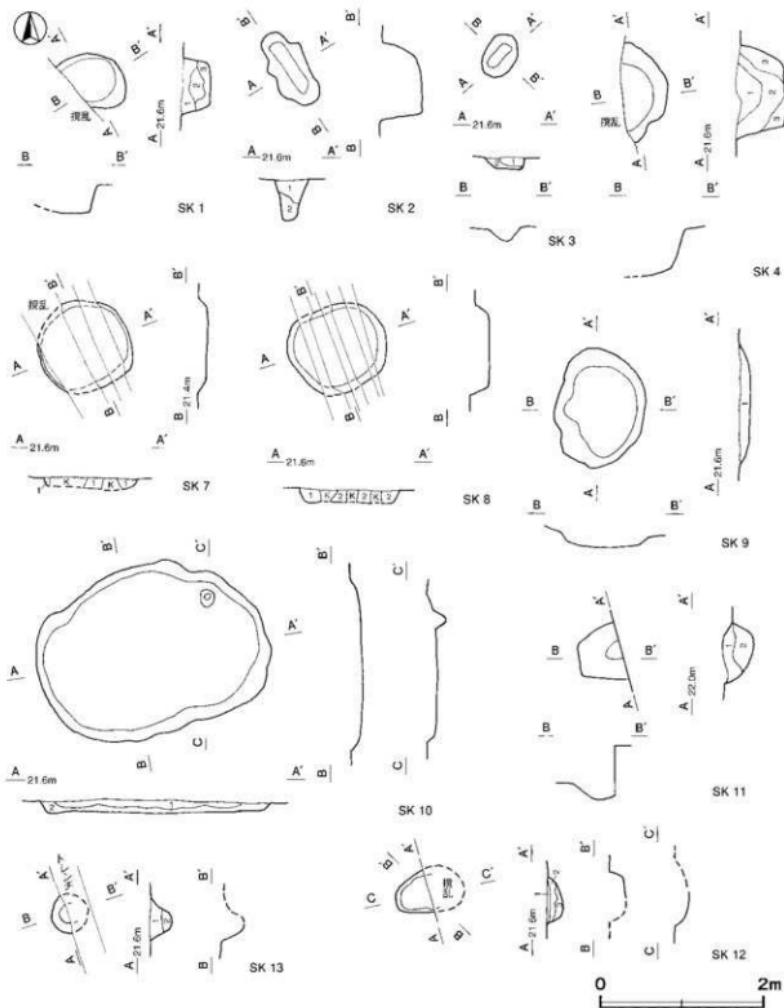


第12図 第1号陥し穴実測図

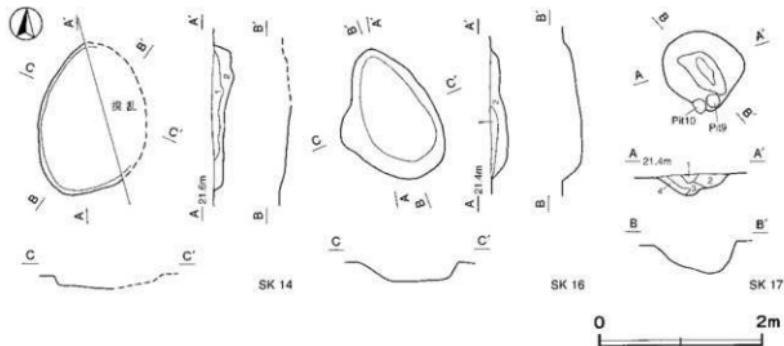
2 その他の遺構と遺物

(1) 土坑 (第13・14図)

今回の調査で、時期不明の土坑14基を確認した。以下、実測図と土層解説及び一覧表を掲載する。



第13図 その他の土坑実測図(1)



第14図 その他の土坑実測図（2）

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

第4号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子中量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第7号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第11号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第15号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

第17号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック微量

表3 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	1 4 w	N - 88° - W	【楕円形】	(0.80) × 0.66	32	平坦	外傾	人為	縄文土器片	
2	1 4 g0	N - 37° - W	不整楕円形	1.01 × 0.43	50	平坦	外傾	人為		
3	1 5 h2	N - 40° - E	楕円形	0.55 × 0.40	14	平坦	傾斜	人為		
4	1 5 i2	N - 8° - W	【楕円形】	1.24 × (0.55)	60	平坦	外傾	人為		
7	1 3 i7	-	円形	1.12 × 1.12	14	平坦	外傾	人為	縄文土器片	
8	1 3 i7	N - 73° - E	楕円形	1.19 × 1.07	20	平坦	外傾	人為	縄文土器片、陶器片	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		裏面	裡面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
9	1 5 i1	N - 5° - E	不整格円形	1.45 × 1.10	14	平坦	縦斜	人為	縄文土器片	
10	1 5 h1	N - 80° - E	不整格円形	2.82 × 2.05	15	平坦	縦斜	自然	縄文土器片	
11	1 5 e1	-	不明	0.72 × (0.54)	20	皿状	縦斜	人為	縄文土器片、土器片	
12	J 4 a6	N - 74° - E	【楕円形】	[0.85 × 0.54]	20	平坦	縦斜	人為		
13	1 4 h5	-	【円形】	[0.49 × 0.48]	25	皿状	外輪	人為	縄文土器片	
14	J 4 a5	N - 24° - E	【楕円形】	[1.89 × 1.33]	14	皿状	縦斜	自然	土器片	
16	J 4 b9	N - 26° - W	不整格円形	1.68 × 1.20	23	平坦	縦斜	人為		
17	J 4 d9	N - 67° - W	不整格円形	0.97 × 0.86	36	皿状	縦斜	人為	縄文土器片、瓦質土器片	本跡→Pt 9・10

(2) ピット (第16図)

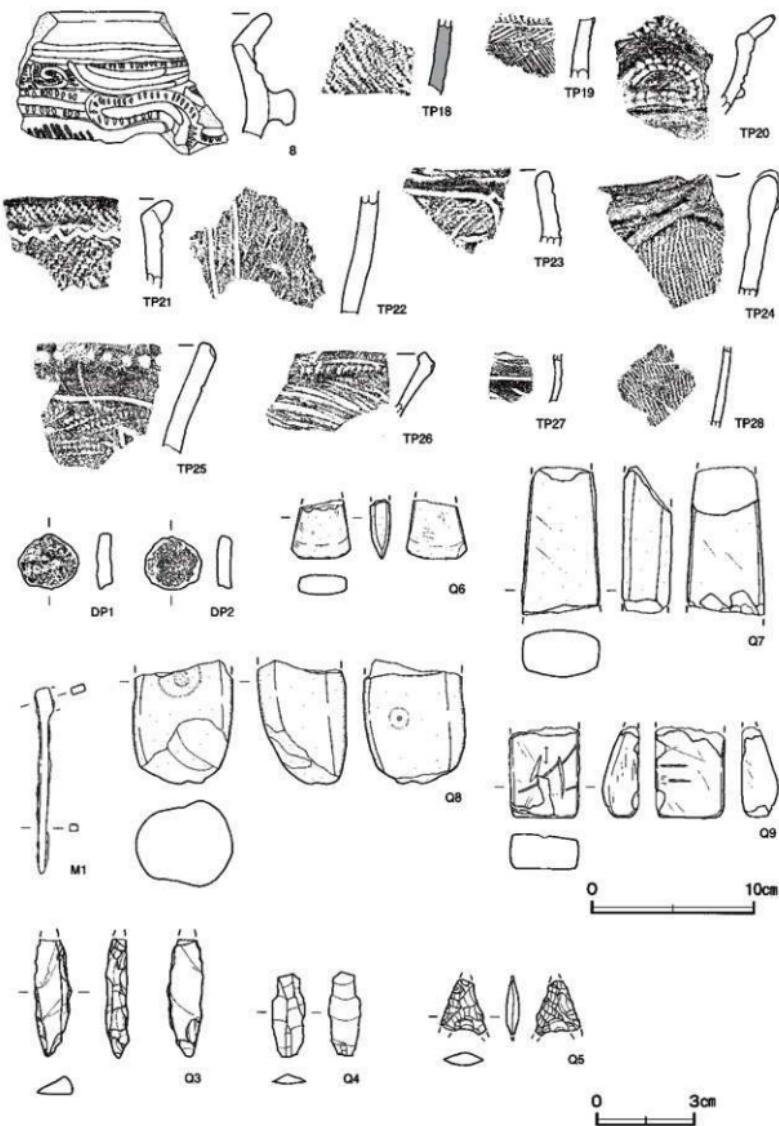
今回の調査で、柱穴状の掘り込みを有するピット59か所を確認した。遺物は縄文土器片や土師器片が少量出土しているのみで、時期は不明である。また、分布状況から建物跡を想定することはできず、性格も不明である。以下、一覧表を掲載し、平面図については遺構全体図で掲載する。

表4 その他のピット一覧表

番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	J 4 d0	不整格円形	33	30	25	21	J 4 c9	楕円形	30	26	28	41	J 4 a3	円形	23	21	14
2	J 4 d0	円形	23	22	29	22	J 4 d9	楕円形	25	20	13	42	I 4 i2	【不定形】	25	[23]	25
3	J 4 d0	不整格円形	29	18	12	23	1 4 g8	不整格円形	28	21	23	43	I 4 i2	【円形】	[27]	25	29
4	J 4 d0	丸く方形	27	27	32	24	1 4 g8	不整格円形	23	19	36	44	J 4 c7	円形	31	30	17
5	J 4 d0	不整格円形	28	22	24	25	1 4 f7	不整円形	23	23	21	45	J 4 c7	楕円形	18	15	16
6	J 4 d0	楕円形	31	25	38	26	1 4 f7	楕円形	32	25	44	46	J 4 c7	楕円形	19	13	19
7	J 4 d0	楕円形	33	28	26	27	1 4 e7	不定形	27	22	40	47	J 4 c7	楕円形	18	16	16
8	J 4 d0	不定形	44	29	18	28	1 4 e7	円形	20	19	19	48	I 4 h3	【楕円形】	25	[22]	20
9	J 4 d0	楕円形	31	25	18	29	1 4 e8	円形	20	19	27	49	I 4 h3	【楕円形】	[28]	23	23
10	J 4 d0	【円形】	23	[22]	35	30	J 4 b6	【楕円形】	26	[23]	18	50	I 4 h2	【円形】	[26]	25	13
11	J 4 d0	不定形	33	30	17	31	1 4 g5	楕円形	19	17	17	51	I 4 i2	【不定形】	33	[28]	26
12	J 4 d0	不整格円形	28	24	22	32	1 4 g5	円形	24	23	20	52	I 4 i2	【楕円形】	38	[22]	18
13	J 4 d0	不整格円形	29	25	23	33	1 4 g5	楕円形	21	19	25	53	I 4 e5	楕円形	23	18	21
14	J 4 d0	不整格円形	21	18	18	34	1 4 g5	【円形】	20	20	20	54	I 4 d5	円形	13	13	21
15	J 4 e9	不整格円形	23	19	19	35	J 4 a5	【円形】	[21]	20	10	55	I 3 h9	楕円形	28	21	27
16	J 4 e9	不整格円形	29	25	22	36	J 4 a5	【不整格円形】	[28]	20	30	56	I 3 h8	楕円形	32	20	22
17	J 4 e9	楕円形	25	18	23	37	J 4 a5	【円形】	[14]	14	20	57	J 4 c2	円形	26	25	29
18	J 4 e9	不整円形	24	24	15	38	J 4 a4	不定形	19	17	17	58	I 5 h1	楕円形	42	37	31
19	J 4 e9	楕円形	31	25	17	39	1 4 i4	不定形	26	21	19	59	I 4 h0	楕円形	31	26	30
20	J 4 e9	不定形	38	22	22	40	1 4 h4	【楕円形】	[27]	22	20						

(3) 遺構外出土遺物 (第15図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第15図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第15図）

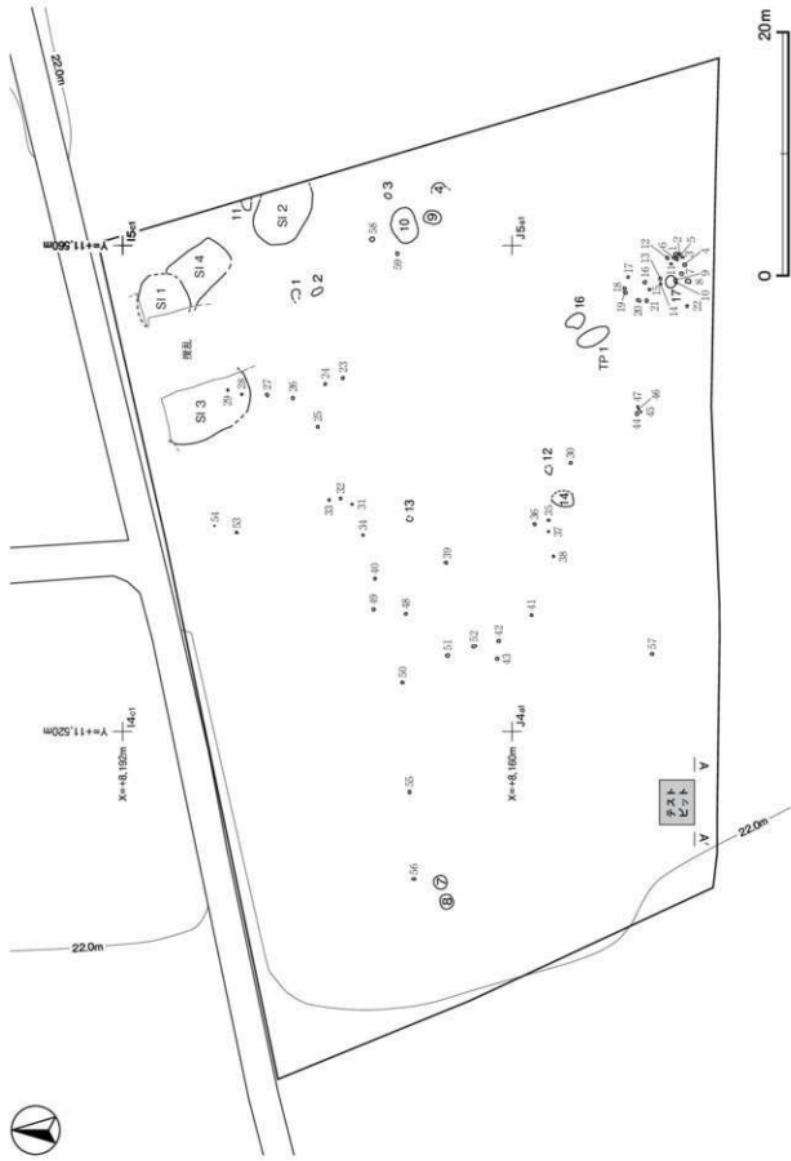
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
S	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	組みと沈澱を有する縦帯で文様を描出 RLの	表土	5% PL 6

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・織維	にぶい橙	RLの單節繩文	SI 3	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	矢羽根状の沈澱	確認面	PL 6
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	縦帯に沿って複列の結節沈澱を施文	確認面	PL 6
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・岩母・赤色粒子	褐	RLの單節繩文 滤状の沈澱文	確認面	PL 6
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	地文の附加条縫文に2条一組の沈澱を垂下	表土	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・岩母	にぶい褐	沈澱による区画文 LRの單節繩文	表土	PL 6
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	口唇部直下に微隆起が巡る LRの單節繩文	表土	PL 6
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・岩母・赤色粒子	黒褐	口唇部に斜文 LRの單節繩文	表土	PL 6
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・岩母	灰褐	口唇部に削み横筋の条縫文	確認面	PL 6
TP27	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	沈澱文	表土	
TP28	洪生土器	壺	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	RLの單節繩文	確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 1	土器片円盤	34	37	09	10.5	長石・石英	無文 周縁部を敲打成形後、一部研磨	確認面	PL 5
DP 2	土器片円盤	32	35	09	10.5	長石	無文 周縁部を敲打成形	確認面	PL 5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	ナマコ形石器	(36)	13	07	(27)	珪質頁岩	両縁調整 先端部欠損	確認面	PL 5
Q 4	細石刃#2	26	1.0	0.3	0.6	チャート	綫長薄片	SI 3	PL 5
Q 5	礫	(1.69)	(1.35)	0.39	(0.8)	チャート	両面を押平溝難 四辺無欠損	確認面	PL 5
Q 6	磨製石斧	(37)	36	12	(25.8)	蛇紋岩	定角式 全面を研磨 基部欠損	確認面	PL 5
Q 7	磨製石斧	(9.1)	(4.7)	30	(221.5)	緑色蘭灰岩	定角式 全面を研磨 刃部・基部欠損	確認面	
Q 8	磨石	(7.6)	62	54	(292.9)	石英斑岩	両面を使用 削石作用	確認面	PL 5
Q 9	砾石	(5.5)	42	22	(73.5)	凝灰岩	上端部欠損 主要な使用面は表面 破熱痕	確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	釣	(11.4)	(1.1)	0.4	(19.5)	鉄	断面長方形	確認面	



第16図 天王原遺跡遺構全体図(凡例 SK: 1, Pit: 1)

第4節 まとめ

1 はじめに

今回の調査で、縄文時代の堅穴住居跡4軒、陥し穴1基を確認し、当遺跡は集落跡、狩り場跡であることが判明した。ここではそれぞれの住居跡について時期を検証し、当該期の住居跡形態について、周辺遺跡との比較を行い、若干の考察を加えることとまとめとしたい。

2 住居跡の時期について

調査区北東部の標高21mの台地上に、縄文時代の堅穴住居跡4軒を確認した。これらの住居跡から主体的に出土している土器は、口縁部内面に稜を有し、胎土には雲母を多く含んでいる。文様には縄文原体を使用せず、隆帯に沿って半截竹管による複列の結節沈線が施文されている。また、胴部に刻み目列が巡るものも確認されている。これらの特徴から、土器群は阿玉台II式¹⁾に比定でき、住居跡の時期は中期中葉と考えられる。ただし、出土している土器に若干の時期差が認められることから、それぞれの住居跡から出土した土器について細分し、時期を検証していきたい。

第1号住居跡については、覆土下層から出土している1の台付壺が、時期決定の指標となる遺物である。文様は「幅広の多截竹管によって連続押圧された」キャタピラー文と「ベン先状工具の連続刺突による」三角押文が隆帯に沿って施文されている。また、胴部には玉抱三叉文が配されていることから、勝坂式土器の範疇に含まれるものと考えられる。キャタピラー文と三角押文という施文技法の組み合わせから、勝坂式土器の中でもやや古相を示しており、1式新段階～2式に比定できる²⁾。TP 1の深鉢も施文方法や文様構成から、勝坂式の系譜を引く土器と考えられ、他系統の土器が一定量認められる。住居跡の時期については、共伴している土器から阿玉台II式期と考えられ、勝坂式土器と阿玉台土器の併行関係については、齟齬は生じないものと考えられる。

第2号住居跡については、主体的に出土している土器は阿玉台II式であるが、TP 6とTP 7は單列の角押文で文様が描出されており、阿玉台I b式に比定できる。古相を示す土器も一定量出土しており、住居跡の時期については、阿玉台I b～II式期と時間幅を持たせて考えておきたい。また第3号住居跡の時期については、主体的に出土している土器から阿玉台II式期としたが、TP14は隆帯に沿って幅広の結節沈線が施文されている。新しい様相を示す土器も出土していることから、阿玉台III式期まで下る可能性もある。

第4号住居跡は、第1号住居に掘り込まれている。本住居跡の出土土器は少ないが、出土土器から両住居跡の時期差はあまりないものと考えられる。時期は、重複関係や出土土器から、第1号住居跡より古い時期の阿玉台II式期と考えられる。

3 住居跡の形態について

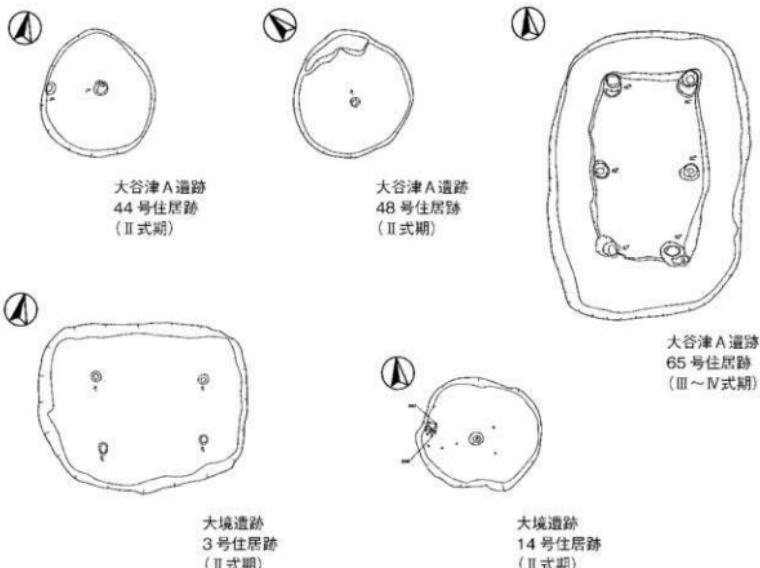
当該期の住居跡については、当遺跡と同じ鬼怒川の流域に位置する大谷津A遺跡³⁾や西谷田川水系の流域に位置する大境遺跡⁴⁾で比較的まとまった数の住居跡が確認されている。

当遺跡の下流約10kmに位置する大谷津A遺跡では、阿玉台式期～加曾利E式期にかけての住居跡61軒が確認されている。そのうち阿玉台式期に比定されるものが31軒で、主体となる時期は阿玉台I b～II式期である。住居跡の形態については、径3～4mほどの円形又は楕円形のものが主体であり、炉は持たない。ピットは、中央部に掘り込みの深いピットがあり、主柱穴と考えられている。

当遺跡で確認された住居跡は、大谷津A遺跡の住居跡とほぼ同時期にあたる。炉は持たないことは共通するが、規模や形状、主柱穴の配置など相違点が多い。当遺跡の住居跡は、搅乱や重複のため規模や形状は明確でないが、径(一辺)が4~6mほどの橢円形又は隅丸長方形のものが主体と考えられる。規模と形状の相違から住居構造にも違いがみられ、主柱穴は5・6本柱の配置のものが主体である。

一方で、当遺跡から北東約6kmに位置するつくば市の大境遺跡では、阿玉台I b~II式期の住居跡15軒のうち、平面形が隅丸(長)方形の住居跡が5軒確認されており、方形系統の住居跡も少なくない。規模の点では、大谷津A遺跡とあまり差がなく、径(一辺)3~4mほどのものが主体である。また主柱穴については、方形系統の住居跡は4本柱の配置のものが主体である。

このようにそれぞれの遺跡の住居跡形態は、相互に類似点を持ちながら、全体としてはそれぞれの遺跡ごとに傾向が異なる。阿玉台式期の住居跡形態については、当財団が県域における住居跡の集成と分析を行っている。その中で時期的な変遷として、「阿玉台式期前半の住居跡は平面形が円形系統で、主柱穴も1か所のものが主体となる。後半になると平面形は方形系統が主体になり、住居の規模が大型化にするのに伴い、主柱穴の本数も4~6本ものが多くなる⁵⁾」としている。このような変遷をたどることから、前述したそれぞれの遺跡の住居跡形態は、時期とともに形態が変化していくなかでの一過程を示しているものと考えられ、その過程には集落を構成する集團によって若干の時期差があったものと推測される。当遺跡における住居跡の形態は、平面形は方形系統の形状を呈し、規模も大きく、主柱穴も複数配されていることから、阿玉台式期後半の要素が強い住居跡と言える。周辺の遺跡と比較して、住居跡の形態変化が先行して進んだ集落と考えられるが、これが何に起因するものは今後の資料の増加を待って結論づけたい。



第17図 周辺遺跡における阿玉台式期の堅穴住居跡 (S = 1/120)

最後に、今回の調査で確認された住居跡のなかで、突出する規模を有する第3号住居跡の形態について考えてみたい。第3号住居跡は搅乱を受けており、本来の形状は明確でないが⁴⁾、長径(軸)が8mほどの椭円形又は隅丸長方形の住居跡と考えられる。床面は壁際が中央部に向かって緩やかに傾斜し、壁際を除く中央部がわずかに凹んでいる。その凹みの際に、主柱穴が配されている。当該期の住居跡の規模としては大形であり、特異性がうかがえる。ここでは床面の形状に着目して二段掘り込みを有する住居跡を想定してみたい。

二段掘り込みを有する住居跡は、茨城県南部と千葉県北西部を中心として阿玉台式期後半に多く確認されている住居跡で、平面形や主柱穴の配置、壁溝の有無からいくつかの形態に分類されている⁵⁾。大谷津A遺跡で確認されている住居跡（第17図）は、平面形は隅丸長方形で長軸が7mほどである。下段の掘り込み部に合わせて主柱穴が配されている。当遺跡で確認されている第3号住居跡は、規模の点でも遜色はなく、主柱穴の配置も近似するが、上段と下段の境が明確でないこと、搅乱のため依存状況が不良であること、時期的にもやや先行することから、ここでは可能性があるにとどめておきたい。

4 小結

調査区は遺跡の南端あたり。住居跡の確認状況から、集落の広がりは北東方向に展開するものと考えられる。調査は限られた範囲ではあったが、集落の様相をうかがい知る上で、断片的ながらいくつかの情報を得ることができた。共伴している勝坂式土器の存在や住居跡の形態に先進性が認められる点など、調査の成果が、当遺跡の集落の様相を解明する上で、一助となれば幸いである。

註

- 1) 小林達雄編『縄文 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 2008年6月
- 2) 註1) と同じ
- 3) 鈴木美治・佐藤正好・高村勇「水海道都市計画事業・小堀土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告書』第28集 1986年3月
- 4) 川井正一「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 大境遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告書』第34集 1986年3月
- 5) 縄文時代研究班「茨城県における縄文時代中期前半の住居跡形態について」『研究ノート』4号 1995年6月
- 6) 縄文時代研究班「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴遺構」について」『研究ノート』5号 1996年6月

写 真 図 版



調査区遠景（西側上空から）



調査区全景（東側上空から）

PL2



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 跡
完 据 状 況



第2号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
完掘状況

PL.4



第4号住居跡
完掘状況



第1号陥し穴
完掘状況



第1～4号住居跡
完掘状況



SI 1-3



SI 1-4



SI 1-2



SI 1-1



遺構外 - DP 1



遺構外 - DP 2



遺構外 - Q 3



遺構外 - Q 4



遺構外 - Q 5



SI 2 - Q 2

遺構外 - Q 6



遺構外 - Q 8

第1・2号住居跡、遺構外出土土器、土製品、石器



第1・2・3号住居跡、遺構外出土土器

抄 錄

仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Home Premium ServicePack1
レイアウト Adobe InDesign CS4
図版作成 Adobe Illustrator CS5
写真調整 Adobe Photoshop CS5
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組 版 OpenType13級リュウミンPro・L 基本
Adobe InDesign CS4
印 刷 オフセット印刷
写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線
・印刷所へは、Adobe InDesign CS4でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第371集

天 王 原 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財團

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 （有）川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551